

# 19世紀フィンランドにおける 文化人によるアルキーヴ利用の例

平井 孝典

## はじめに

21世紀においては、ジャーナリストや評論家なども、アルキーヴ (Arkiv) を閲覧し業務に反映させることは当然のこととされる。情報公開制度が整備されている。一定の年数の経過した資料は、ネット画像で確認することも可能である。情報公開制度の利用方法や、アルキーヴ提供のネット画像へのアクセス方法が不明なこともある。博物館提供のネット画像と同様に、行きつけの公共図書館のレファレンスで尋ねることもできる。

19世紀においては、ジャーナリストや小説家らが、アルキーヴをその書庫で悉皆調査するのは容易ではなかったかもしれない。だが、アルキヴァーリエ (arkivarie) が目録作成する、あるいはそのコピーを刊行することは始まっていた。

19世紀フィンランドのアルキーヴ業務でも、情報アクセス環境を整える実務内容として、公文書や私文書のカタログ作成、公文書や私文書の活字化刊行 (その刊行物、資料集を図書館が所蔵)、あるいは、アルキヴァーリエ自身による公文書や私文書の解説公刊がある。公文書や私文書の解説は、資料集に掲載され、前書きのような形で存在することもある。資料集や新聞の中で個々の手紙やプロトコールごとになされることもある。

本稿では、アルキヴァーリエによる成果物がどのように活用されたか、数例ではあるが紹介を試みてみたい。本稿ではSLS (Svenska litteratursällskapet i Finland, フィンランドのスウェーデン語文献協会) の研究を活用し、ザクリス・トベリウスによる、大学図書館アルキヴァーリエ、エドヴァルド・グルーンブラードの成果の活用をみておく。

なお、本稿でもアルキヴ（arkiv）及びアルキヴァーリエ（arkivarie）というスウェーデン語のカタカナ表記を使う。19世紀フィンランドの公文書で主に用いられた言語はスウェーデン語であり、アルキブはアーカイブズ（archives）と完全には対応しないからである。アルキブは、本来の資料（群）という意味のほか、役所での記録管理担当部署と公文書館を意味する。アルキヴァーリエは、記録管理担当部署での記録管理担当者も公文書館職員も意味する。

### 1. 19世紀のアルキヴァーリエの業務

18世紀以降、公文書にアクセスし利用することがスウェーデン及びフィンランドで始まった。印刷刊行技術の普及期であり、公文書も早速この技術を用い広く頒布された。瓦版のようなものである。政府の情報を活字化し伝えることが積極的に行われた<sup>1</sup>。

公文書にアクセスし利用することは1766年に追認された。スウェーデン及びフィンランドのアルキヴでの資料の利用も、資料へのアクセス権が根拠となる。基本法での権利として確立した。1766年12月2日布告の「印刷の自由法」（Tryckfrihetsförordningen den 2 december 1766）第6条は様々な公文書及び将来の作成取得が想定されるあらゆる資料を条文で列挙しアクセス権を明確に認めている<sup>2</sup>。

フィンランド戦争後の1809年にスウェーデン東部地域はロシアの支配

---

1 例として、Relation om de emellan hans kongl. may:tt af Swerige, och desz fiender, ifrån den 17. octobris til den 1. novembris 1704. i Stor-Pohlen förefalne träffningar という王立印刷所による頒布物がある。カール7世による大北方戦争の報告のひとつである。日付の直後に印刷されたものと推察される。1枚の紙を折り畳み、8ページの構成になる。おそらく、情報アクセス環境はこのような断片的な、現代で言えば広告紙のようなもので実現されたのが初期段階である。まもなく、新聞のような刊行物の一部に、あるいは図書の形を取る資料集に整理され掲載されるようになった。

2 Skuncke 2011. 平井 2013. Nygren 2016.

下、フィンランド大公国となる。基本法と身分制議会は「継続」し、情報アクセス権も存続する<sup>3</sup>。

### 1.1 エドヴァルド・グリーンブラード

1816年にセナーッティ公文書館（実務の対象範囲や名称変遷をへて、現在の国立公文書館）が成立、行政職員による実務が進められる。短期間、ガブリエル・レイン（Rein Gabriel, 1800–1867）<sup>4</sup> が臨時のアルキヴァーリエになるが、成果は十分にあげられなかった<sup>5</sup>。1843年ごろからは、グリーンブラードが大学図書館から週二日程度、出向し実務を担う。フィンランドの国立公文書館の実務史の中で、初めての本格的なアルキヴァーリエである。

グリーンブラードの業務展開に先立ち、歴史学者らによるアクセス権の行使は増える。その成果は、ひとつには資料の活字化作業であり、積極的に刊行された。「フィンランドに光をあてる資料集」などといった文言とともに刊行された。

### 1.2 フィンランドでの歴史資料の刊行

フィンランドではヘンリック・ガブリエル・ポルタン（Henrik Gabriel Porthan）が歴史学の扉を開いたと言われている<sup>6</sup>。このポルタンが18世紀の図書館に関わる文書を刊行した<sup>7</sup>。あるいは新聞にフィンランドの歴史に関わる資料を活字化し刊行したのがフィンランドでの歴史資料の刊行の嚆矢である<sup>8</sup>。

---

3 Vahtola 2017. s182. 憲法を構成する18世紀末の複数の基本法及びその継承について説明されている。

4 BLF. n.d. <<https://www.blf.fi/artikel.php?id=3595>> (luettu 25.10.2021).

5 Kerkkonen 1995. s39-40.

6 Jussi Nuorteva, Päivi Happonen 2016. s24.

7 Knapas 2012. s66.

8 Kerkkonen 1995. s20.

## 2. 成果

活字化され刊行された行政文書などは、新聞や Suomi のような定期刊行物に掲載されていった。資金があれば、資料集として刊行された。

### 2.1 定期刊行物などへの掲載

ボルタンは、自らもメンバーであるオーロラ協会発行の新聞に、資料を活字化し掲載した<sup>9</sup>。フィンランド最初の新聞は、資料の紹介あるいは提供が大きな役割であったことになる<sup>10</sup>。オーボロマン主義の具現者の一人<sup>11</sup>、アドルフ・アルヴィドソン (Adolf Ivar Arwidsson) も、オーボアカデミ (今のヘルシンキ大学) 講師の時期には、新聞オーボ・モルゴンブラード (Åbo Morgonblad) を発刊し資料を活字化して掲載した<sup>12</sup>。

### 2.2 資料集の刊行

グリーンブラードは、1843年から46年に史料集 Handlingar rörande Klubbekriget / utgifna af Edward Grönblad [棍棒戦争関係史料／エドヴァード・グリーンブラード編集] を刊行している。Nya Källor till Finlands Medeltidshistoria [フィンランド中世史の新史料] を1857年に刊行している。1843年の史料集には3巻それぞれに長い前文解説が掲載されていた。1857年の史料集には前文解説はなく、個々の史料説明が増えている。史料名に付される注は史料本文よりも場合によっては数倍程度の長さとなり、もはやそれ自体が長い研究解説文である。

この1857年の史料集刊行の際、セナーッティに刊行許可とセナーッティ

---

9 Tidningar Utgifne af et Sällskap i Åbo は Aurorasällskapet (フィンランド語は Aurora-seura, オーロラ協会) により刊行。1771年1月15日創刊。Kerkkonen. 1995 s21. Kansalliskirjasto 2001-.

10 Jussi Nuorteva, Päivi Happonen 2016. 22-24s

11 Sarjala 2020. s14.

12 創刊号は05.01.1821, 創刊の案内は、既存の新聞 Allmänna Tidning Finlands Allmänna Tidning 20.11.1820 no 136にある。

などによる刊行費助成を求めている（平井 2019）。なお本稿ではトペリウスの1845-1852刊行の本を主に扱う。グルーンブラードについても、これ以前の成果が対象となる。

### 3 アルキヴァーリエによるレファレンス

セナーッティ公文書館がレファレンスを開始したのはグルーンブラードの断簡プロジェクトの進められていた時である<sup>13</sup>。レファレンスが安定的に実施されるには、専任職員の配置と定時開館を行うことが必要である。定時開館の開始時期は、1859年以降と考えられる<sup>14</sup>。1640年設立の国立図書館（大学図書館）は1867年から定時開館がカール・コラン（Karl Collan, 1828-1871）により実施され始めた<sup>15</sup>。セナーッティ公文書館と同じく平日の11時から2時を基本とする。セナーッティ公文書館は国内の類似施設を参考にすることなく先行したことにはなる。

トペリウスに、エドヴァルド・グルーンブラードとの直接の接触があったのか、グルーンブラード側の資料を見る限りは不明である<sup>16</sup>。トペリウスの受領した文書には、グルーンブラードの近親者と思われる人物は登場する<sup>17</sup>。SLS はトペリウスの日記の人物紹介で、エドヴァルド・グルーンブラード本人、母親、官僚であった兄弟を掲載し参照できるようにしている<sup>18</sup>。

### 4. トペリウスの活用例

『素描のフィンランド産業』（Finland framställt i teckningar）は1845-1852

---

13 平井 2017a. 大学から兼任し公文書館で仕事をしていた時期は、1844年から1856年。Kerkkonen 1995. s49.

14 Kerkkonen 1995. 67s. 平井2017a.

15 Knapas 2012. s162. コランの在職期間は、1865-1871と短いが図書館の改革者として紹介される。ドイツ語講師、作曲家でもあった。

16 Grönblad, Edvard (1814-1864), Handskriftssamlingarna vid Åbo Akademis bibliotek.

17 Zacharias Topelius Skrifter n.d. に Glönblad と入力すると、近親者と思われる人物からの文書を閲覧できる。

18 Topelius, Asp, Kilpelä & Topelius 2018. s1364.

年に刊行されたものである。クヌートソン (Johan Knutson, 1816-1899) から複数の画家による120のリトグラフが主に巻末に掲載されている。対象は、農村生活の様子など、地方小都市や田舎の営みである。大きな地図も別に付されている。地域別に、代表的な事物のスウェーデン語解説文を書いているのが、ザクリス・トペリウス (Zacharias Topelius, 1818-1898) である。

『素描のフィンランド産業』は、2011年に、SLS のトペリウス著作集のひとつとして復刊され<sup>19</sup>、グランデル (Grandell, Jens) 及びクナプス (Knapas, Rainer) による解説文が最初につけられている。同時代の新聞紙、Morgonbladet による批評が紹介されている<sup>20</sup>。あるいはまた、当時のクリピネン (W. Klipinen) による、フィンランド語資料を踏まえての批判も紹介されている<sup>21</sup>。トペリウスがフィンランド語資料を参照しないのは、フィンランド民族を描写するには不十分ということである。ただし、トペリウスのこうした試みが先行した結果、1860年代のハニカイネン (Pietri Hanikainen) による、フィンランド語解説による同様の刊行物の成果につながるであろう<sup>22</sup>。

SLS による他のトペリウス著作刊行と同じく、人物などの解説や索引もあり、辞書のように参照できる。

#### 4.1 トペリウス

トペリウスは、19世紀の文化人としてまずは名前が上がる一人である<sup>23</sup>。1818年に農家に生まれたトペリウスは、大学で学んだ後には、中等教育に従事するなど、並外れた行動力や意志で活躍したと称えられている。

ジャーナリスト、作家、大学の歴史学教授など、いくつもの肩書きのあ

---

19 Topelius, Grandell, Knapas, Knutson & Wright 2011.

20 Topelius, Grandell, Knapas, Knutson & Wright 2011. XVII.

21 Topelius, Grandell, Knapas, Knutson & Wright 2011. XVIII.

22 Topelius, Grandell, Knapas, Knutson & Wright 2011. XVIII.

23 Sarjala 2020. s19. のようにトゥルクロマン主義者について概括した研究にも登場する。ロマン主義者とも深く交流していた。

る人物である<sup>24</sup>。この文化人も当然のように、歴史的資料やアルキヴァーリエの成果を活用している。ここでは、『素描のフィンランド産業』でのグルーンブラードの成果の活用例に触れたい。SLS による索引を参考にしている。

#### 4.2 成果の利用(1) 中世の時代区分

スウェーデン東部地域であるフィンランドの中世区分を考える際に、アルヴィドソン (Rühs 1813) とグルーンブラードの中世資料の活字化刊行の成果、解説 (Grönblad 1843) を参考にしている<sup>25</sup>。

#### 4.3 成果の利用(2) サイマー運河の工事開始

サイマー運河は、今日も使われている運河である。南部にあるサイマー湖から、現在はロシア領となる都市ヴィボルグを結ぶ。1845年に建設が始まり、1856年に開通した。1968年以降は、ロシア側に賃料を支払い、フィンランドにより運営されている<sup>26</sup>。

グルーンブラードは、資料解説の定期刊行物、Suomi の1845年版の冒頭に、カール9世により始められた (が中断した) と述べている。これをトペリウスが引用している<sup>27</sup>。カール9世は戦争による財政難から工事の進展を望むことはなかったが、掘削の開始が試みられた時期をトペリウスは確認しようとしている。

この引用の後、トペリウスは、ソースを示していないが、国家予算を超える巨費が投じられたことも説明している。今日中等教育での教科書で

---

24 Uppslagsverket Finland. n.d. <<https://www.uppslagsverket.fi/sv/sok/view-170045-TopeliusZacharias2>> (luettu 25.10.2021). Zacharias (Zachris, Sakari)Topelius - 375 Humanister n.d.(luettu 25.10.2021).

25 Topelius, Grandell, Knapas, Knutson & Wright 2011. s60.

26 サイマー運河の経営をしている Väylävirasto のホームページ<<https://vayla.fi/etusivu>> (Accessed: 24 October 2021)。

27 Topelius, Grandell, Knapas, Knutson & Wright 2011. s219.

も同様の記述がみられる<sup>28</sup>。

#### 4.4 成果の利用(3)

トペリウスは、1604年に即位するカール9世について言及している。王位につくまでの過程における諸説伝承を紹介した上で、「カール9世は1602年2月の不安の時期にここに滞在した。しかしながら、最近登場の歴史学研究者（グルーンブラード）は、それには理由があるように見えると、この状況に疑問を持っている。・・・」と資料に根拠をおくアルキヴァーリエの指摘を紹介している<sup>29</sup>。おそらく、グルーンブラードによる『棍棒戦争関係史料』第1巻での解説などからの説明と思われるが、引用箇所については省略されている。

#### 4.5 成果の利用(4)

棍棒戦争に関してグルーンブラードが紹介した資料を参照したことが示されている<sup>30</sup>。

### 5. 今日でのデジタル利用

本稿で言及された資料のネット公開状況について確認しておきたい。

#### 5.1 19世紀の出版物のデジタル公開

先述したように、19世紀実務は、情報アクセス権を根拠に、行政文書を活字化し、当時の最新技術である印刷技術で広く頒布された。

今日に至ってはさらに、掲載された新聞も、資料集も、ネットで見られ

---

28 Aalto, Jari, Aromaa, Vuokko & Haapala, Pertti 2018. Kaikkien aikojen historia. 3, [Schülerband]: Itsenäisen Suomen historia / Jari Aalto, Vuokko Aromaa, Pertti Haapala [und 2 weitere]. Helsinki: Edita. s23.

29 Topelius, Grandell, Knapas, Knutson & Wright 2011. s132.

30 Topelius, Grandell, Knapas, Knutson & Wright 2011. s254.

るようになってきた。

フィンランドの定期刊物は、1920年代までの多数が、国立図書館の専用サイトで閲覧できる<sup>31</sup>。ポルタンの新聞も、このサイトのベータ版公開当初はわずかな号数のみであったが、今は最初の号も含め、見ることができる。OCRで検索することもできる。全文検索を基本とするシンプルなものである。

#### 4.2 資料集のデジタル公開

グルーンブラードらの資料集は、刊行当時に、ドイツなど多くの図書館で所蔵され閲覧に供された。試みに、史料集 *Handlingar rörande Klubbekriget / utgifna af Edward Grönblad* [棍棒戦争関係史料/ エドヴァド・グルーンブラード編集] を World Cat で検索すると13件ヒットする<sup>32</sup>。例えば、バイエルン州立図書館で画像公開されている成果も多数ある<sup>33</sup>。

#### 5.3 トペリウス関係資料の SLS によるデジタル公開

トペリウス関係資料の検索の試行版が SLS のサイトで公開されている<sup>34</sup>。所蔵する手紙（受信）資料などが画像化されており、人物や事物の検索が可能である。デジタル画像も閲覧できる。とりあえず、種類ごとに全文検索はできるようにしてある。

付言すると、当然、SLS を訪れれば、丁寧なレファレンスをスウェーデン語、フィンランド語、あるいは英語で受けることも可能であり、また当時の文献を直接、閲覧することも可能である。

---

31 Digitaaliset aineistot - Kansalliskirjasto n.d.

32 <https://www.worldcat.org/> (Accessed: 17 October 2021).

33 例えば、Suomi: kirjoituksia isänmaallisista aineista n.d.

34 Zacharias Topelius Skrifter n.d.

おわりに

本稿では、19世紀フィンランドにおける、アルキヴァーリエの情報アクセス環境を整える業務を簡略に確認した。その上で、ザクリス・トペルウスの『素描のフィンランド産業』（Finland framställt i teckningar）での活用例を確認した。

大学図書館アルキヴァーリエであった、エドヴァルド・グルーンブラードは、フィンランドに光をあたえる資料を、多くの人が活用できる環境を整えられるよう努力した一人である。

ザクリス・トペリウスは、19世紀のもっとも知られた文化人の一人である。一次資料を徹底的に扱う研究者、という捉え方はあまりされないかもしれない。実際、『素描のフィンランド産業』においても、公文書館資料が直接に活用された箇所はないようである。とはいえ、同時代の一次資料に関わる業務の成果を踏まえている。本稿で触れた部分は四箇所のみであったが、このことは十分に理解されうる。

## 文 献 literature

アーカイブズ資料 Primary source

Grönblad, Edvard (1814-1864) , Manusam, Åbo Akademis bibliotek, Handskrifts amlingarna.

Upplysningar om Missale Aboence och andra liturgiska skrifter (Edvard Grönblad), DII45, Käsikirjoitustilaus, Kansalliskirjasto.

刊行資料 Secondary source

BLF. n.d. <<https://www.blf.fi/>> (luettu 25.10.2021).

Grönblad, Edvard 1843. Urkunder upplysande Finlands öden och tillstånd i slütet af 16de och börjau af 17de århundradet: Första flocken Handlingar rörande klubbekriget. 1843. Helsingfors: J. Simelii arfvingar. <<https://opacplus.bsbmuenchen.de/title/BV020705560>>.

Grönblad, Edvard 1857. Nya källor till Finlands medeltidshistoria. 1857. <<http://libris.kb.se/bib/384950>>.

Helsingin yliopisto 2003-. Ylioppilasmatrikkeli 1640-1852. n.d. <<https://ylioppilasmatrikkeli.helsinki.fi/>> (luettu 25.10.2021).

平井, 孝典 2013. フィンランドにおける「中央政府アーカイブズ」の始まり.レコード・マネジメント. 65, 30–47. DOI: 10.20704/rmsj.65.0\_30.

平井, 孝典 2014. 19世紀フィンランドにおける情報アクセスのための実務.アルヴィドソンら「アーキビスト」による成果について. レコード・マネジメント. 67, 50–70. DOI: 10.20704/rmsj.67.0\_50.

平井, 孝典 2017a. 19世紀後半フィンランドの国家公文書館. レコード・マネジメント. 72, 52–67. DOI: 10.20704/rmsj.72.0\_52.

平井, 孝典 2017b. フィンランド中世カトリック教会断簡コレクションのデジタル公開. 藤女子大学文学部紀要 = The bulletin of the Faculty of Humanities, Fuji Women's University. (54), 167–196. <<https://ci.nii.ac.jp/>

naid/120006328870>.

平井, 孝典 2019. 19世紀フィンランドにおける史料集刊行とセナーツェイでの審議の例 : 1859年1月22日プロトコルの紹介. 北欧史研究.(36), 31–43. <<https://ci.nii.ac.jp/naid/40022072772>>.

Kansalliskirjasto. Digitaaliset aineistot - Kansalliskirjasto. n.d. <<https://digi.kansalliskirjasto.fi/>> (luettu 25.10.2021).

Kansalliskirjasto 2001-. Sanomalehdet. Available at: <https://digi.kansalliskirjasto.fi/sanomalehti/search?language=fi> (Accessed: 24 October 2021).

Kerkkonen, Martti 1988. Suomen arkistolaitos Haminan rauhasta maan itsenäistymiseen. Helsinki: Valtionarkisto.

Kerkkonen, Martti 1995. Finlands Riksarkiv 1809 - 1917: det finska arkivväsendets historia från Fredrikshamnfreden till självständigheten. Stockholm: Svenska Riksarkivet.

Knapas, Rainer 2012. Tiedon valtakunnassa: Helsingin yliopiston kirjasto - Kansalliskirjasto, 1640-2010. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

Jussi Nuorteva, Päivi Happonen 2016. Suomen arkistolaitos 200 vuotta -Arkiverket i Finland 200 år. Kansallisarkisto / Riksarkivet.

Nygren, Rolf 2016. TF 1766 i sin historiska och rättsliga kontext : Ett försök till sammanfattning. Sveriges Riksdag, 167–203. <<http://urn.kb.se/resolve?urn=urn:nbn:se:uu:diva-366050>>.

Rühs, Friedrich 1813. Finland och dess invånare : af Friedr. Rühs. Andra och tredje delen. Text. <<https://www.doria.fi/handle/10024/69494>> (luettu 25.10.2021).

Sarjala, Jukka 2020. Turun romantiikka: aatteita, lukuvimmaa jayhteistoimintaa 1810-luvun Suomessa. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

Skuncke, Marie-Christine 2011. Freedom of the Press and Social Equality in Sweden, 1766–1772, 109–144. In: Scandinavia in the age of revolution:

Nordic political cultures, 1740-1820. ed. Ihalainen, Pasi et al. Farnham, Surrey ;

Burlington, Vt: Ashgate.

Suomalaisen Kirjallisuuden Seuran, Biografiakeskus. Available at: <https://kansallisbiografia.fi/> (Accessed: 24 October 2021).

Suomi: kirjoituksia isänmaallisista aineista. n.d. <<https://opacplus.bsb-muenchen.de/search?id>>.

Svenska litteratursällskapet i Finland 2008-. Biografiskt lexikon för Finland (BLF). Available at: <http://www.sls.fi/sv/projekt/blf-biografiskt-lexikonfinland>(Accessed: 24 October 2021).

Topelius, Zacharias, Grandell, Jens, Knapas, Rainer, Knutson, J. & Wright, Magnus von 2011. Finland framställt i teckningar. Helsingfors : Stockholm: Svenska litteratursällskapet i Finland ; Atlantis.

Topelius, Zacharias, Asp, Pia, Kilpelä, Eliel & Topelius, Zacharias 2018. Dagböcker. Helsingfors: Svenska litteratursällskapet.

Zacharias Topelius Skrifter. n.d. <[//topelius.sls.fi](http://topelius.sls.fi)> (luettu 25.10.2021).

Zacharias (Zachris, Sakari) Topelius - 375 Humanister. n.d. <<http://375humanistia.helsinki.fi/sv/humanisterna/zacharias-topelius>> (luettu 25.10.2021).

Uppslagsverket Finland. n.d. <<https://www.uppslagsverket.fi/sv/start/>> (luettu 25.10.2021).

Vahtola, Jouko 2017. Suomen historia: kivikaudesta 2000-luvulle. Helsingissä: Kustannusosakeyhtiö Otava.

柳沢, 伸司 1988. スウェーデン「一七六六年出版自由法」成立過程. 新聞学評論. 37, 131-141,316. DOI: 10.24460/shinbungaku.37.0\_131.

本稿は「19世紀フィンランドにおける資料保存の実務と後世への影響の基礎的研究」(科学研究費補助金 17K00464 基盤研究(C)2017-04-01 – 2022-03-31 研究代表者: 平井孝典)の成果の一部である。